

【波】

昭和三十二年。

夏。

中野。

鳥口守彦が、久々に京極堂を訪れていた。

急激に様変わりしつつある中野駅からおおむね徒歩二十分。京極堂へと至る眩暈坂はしかし、相変わらず整備されていない。このあたりまで来ると時間が止まっているかのようだと、鳥口は思った。

京極堂の店主・中禅寺秋彦もまた、年齢を感じさせない男だった。

いつ見ても、顔つきは剣呑である。近づきがたい雰囲気、この男にはある。中禅寺秋彦の周囲を覆い尽くしている幾多の古本が、まるで時空を超えたかのような存在感を放っているために、そう思えるのかもしれない。鳥口が勤めるカストリ雑誌業界とはえらい違いである。すでに戦後ではなくなっていた。「りべらる」が廃刊されて以来、カストリ雑誌業界も激変しつつある。「月刊實録犯罪」もいつまで発行し続けられるのか。

「あれ？ 中禅寺先生、千鶴子さんはお留守なんですか？」

「誰が先生なものかね。千鶴子ならば、今日も雪絵さんと映画を観に出かけているよ。そんなわけでお茶が飲みたいのならば、自分で入れたまえ」

「今や猫も杓子も映画ですもんねえ。その上、赤坂では途方もない高さの電波塔が建設中ですよ。来年にはあの塔が竣工されて、いよいよテレビ放送事業が本格化するらしい。いずれば一家に一台テレビジョンが置かれるという時代が来るそうです。このままじゃあどんどん映像メディアに押されて、活字しか扱えない出版業界はお先真っ暗ですよ」

「そうでもないよ。たしかに本という媒体は音こそ出ないが、文字と絵を同時に取り扱うことはできるじゃないか。江戸の町では、芝居小屋は繁盛していたが本だって読まれていたのだ。芝居が映画に置き換わったからと言って、本という媒体がこの世から消滅するよいうなことはないよ」

「そりゃ、先生がいつも渋い顔をして眺めている妖怪本は、挿絵が主役みたいなもんですがね……って、今日先生が眺めているそいつは妖怪本じゃありませんね。そりゃなんですか？ 製本されていませんか？ 錦絵ですか」

「これはそんな古いものではないよ。紙芝居だよ。上方で使い捨てにされている不要な紙芝居を、近頃、収集するようになってね」

「紙芝居!? なんだってそんなものを？ そいつは子供が見るもんでしょ。しかも紙芝居はもう、貸本に押されて落ち目ですよ。早晚、消滅しますよ」

「鳥口君。僕は古書屋だよ。紙芝居は製本こそされてないが、立派な絵物語じゃないか。子供向けだからと言って失われていいはずがない。むしろ製本されてないからこそ、容易に散逸してしまふ宿命のものだ。大量に刷られるような性質のものでもないしね。だからこそ、保存して後世に伝えたいのだよ」

「ははあ。投機みたいなもんですか。今では二束三文の紙芝居も、あと五十年もすれば、お宝になるんですかね？ もしかして、ものによっては十万円くらいに高騰したりして」

「何を言っているのだ鳥口君。僕はなにも投機目的でやっているんじゃないよ」

「うへえ。それにしてもまた不気味な絵ですねえ、その紙芝居は。でも、なんとというか、絵柄に独特の愛嬌がありますね」

「ああ。紙芝居は因果応報ものの怪奇譚、復讐譚が多いが、僕が今手にしている『空手鬼太郎』は少々毛色が違う。なにしろ、空手使い同士が戦う話なのだ。もともとこの主人公の鬼太郎という少年は墓場で生まれてきた怪異な運命を持つ少年で、鬼太郎という物語じたいは因業ものだったのだがね。『戦前』に関東で人気を博していた『ハカバキタロー』という紙芝居作品をもとにしているそう。その、『空手鬼太郎』の原点ともいべき『ハ

カバキタロー』のほうも今、探しているところなのだが、なにしろあれは古いものだし、東京大空襲があったからね」

「ほう、親父が目玉なんですね。こりゃあ先生が言うところの妖怪だ。ああ、なるほど。因果ものの紙芝居には、妖怪やら幽霊やら化け物が続々と出てきますからね。そういう怪異なものを見つけたら、保存せずにはおられないわけだ。さすがは京極堂大先生」

「いや。妖怪、幽霊、化け物、それらをいちいち定義しはじめると日が暮れてしまうし何度か君には話したと思うから割愛するが、『空手鬼太郎』には僕が言うところの妖怪は出てこないよ。姑獲鳥も魍魎もね。江戸期の鳥山石燕あたりの妖怪画とは関連がないのだ」

「この目玉の親父は妖怪でしょ?」

「……ああ。たしかにこの親父は、紙芝居作者が創作したオリジナルの化け物ではあるね。作者がこの目玉の親父を妖怪だと定義すればその瞬間に、親父は『新しい昭和の妖怪』ということになるね」

「新しい昭和の妖怪? 現代人が勝手に妖怪を作ってもいいものなんですか? ああいうものには、歴史が必要なんじゃあ……」

「あのね、鳥口君。妖怪は生物じゃないのだから。人間の認識が生みだすものだからね。そもそも、鳥山石燕だってたくさん妖怪を自作しているから構わんだ。だが、あいにく、

この紙芝居の作者はもう筆を折ってしまったらしい。君も言ったとおり、紙芝居業界は今や壊滅状態だからねえ。上方から引き払ってしまったそうなんだ。もしかしたら作者は今頃上京して、貸本漫画家にでも転業しているのかもしれないなあ」

「主人公の鬼太郎は妖怪なんですか? 見た目は化け物っぽいですが。隻眼だけならばまだしも、表情がなんともお化け臭い」

「失敬なことを言うなよ。妖怪と人間との区別を外見でつけるだなんて。鬼太郎はただ墓場で生まれたというだけのことです、妖怪ではないよ」

「うへえ。これは申し訳ありません。でも、鬼太郎をいっそ『異界』から来た存在である妖怪にしちまったほうが、お話として据わりがよくなると思いますけれどねえ?」

なるほど。お話として、か……そのあたりは編集者である鳥口君の独壇場だね、と中禅寺は茶を一服しながら『空手鬼太郎』の紙芝居を箱に入れてしまっただんだ。

「そんなことありませんよ。先生の『憑物落とし』って、ほら。なんらかの妖怪的な妄執に憑かれていた人の『物語』をいったんバラバラにして、先生自身がそのバラバラにされたパーツからまったく異なる据わりのいい新しい『物語』を作って、与えてあげる作業じゃあないですか。あれって、一種の編集作業だと思っただけですよ」

「カストリ雑誌業界が斜陽だからって、僕を勧誘するのはやめてくれないか。僕は小説家

にも編集者にもなるつもりはないよ。この世はある意味、娑婆苦なのだ。その上、さらに新しい娑婆苦を原稿用紙の上に作り上げるなど、まっぴらご免だね」

ここしばらく、中禅寺の周辺には、大きな事件がない。

昭和二十年代が終わり、昭和三十年代に突入してから、だったろうか。

戦時中を引きずっていた日本の闇は、急激に消えつつある。

「正直言って、もうこりこりなんだよ。他人の『物語』に強引に幕を引く『黒衣の男』の役割を務めさせられるのはね」

「黒衣の男って、なんでしたっけ?」

「そうか。もうすっかり昔話になってしまったのだな。あの、関口君が書いた幻想小説……まあ、彼にとっては幻想でもなんでもなくて、彼の真実を描いたにすぎないのだが……『目眩』の最後に、僕が登場しただろう?」

「ああ。思いました! 先生と同様にいつも手袋を嵌めていて、女を殺す、殺し屋ですわね」

「まったく。実際の僕は久遠寺医院できちんと憑物落としの難行苦行を務めていたというのに、関口君の世界では僕は問答無用で『物語』に終焉をもたらす黒衣の殺し屋なのだ。今にして思えばあの『目眩』が、例の匣の事件に偶然繋がったのだ」

鳥口が「そう! それです!」と膝を叩いた。

「その久保竣公ですよ、先生。さっき電波塔の竣工が来年に迫っているという話をしたのは、僕が得意にしている駄洒落のつもりだったんですよ。電波塔の竣工。久保竣公。ね? 結局はいつもの通りに脱線しちゃいましたけどね。竣公という言葉に引っかった、うまい格言を思いつかなかったんだなあ……」

「だから、僕は古本屋の店主であって先生じゃないよ」

「神主さんでしょう?」

「神主だって先生とは呼ばれんだろう。それで、久保竣公がどうかしたのかい? もうすべては終わったことなんだ。『月刊實録犯罪』の売り上げが危機的な状況に陥っているからといって、今さら彼の話を蒸し返すのはどうかと思うよ。君だって当時、あの事件についてあれだけ取材を続けていながら、なにも書かずに静かに幕引きをしてくれたじゃないか。久保竣公が関わったあの武蔵野連続バラバラ殺人事件を含むいわゆる『猟奇』事件が世間の興味を引きつけて、関係者たちの生活が壊されてしまうという最悪の結末を回避できたのは、ある意味、鳥口君のおかげと言ってもいいんだよ」

「ち、違いますよう。久保竣公の事件を蒸し返すつもりなんて、僕にはありませんし、それがわが社の社風でもありますよ。ただ……蒸し返してきた者がいるんですよ」

なんだって？と中禅寺が片眉をつり上げた。突然、三千世界の業をすべて背負わされたかのような、陰鬱いんうつな表情となった。鳥口は「うへえ」と震え上がりながら、鞆かばんを開いて手垢てあかのついた書籍を取り出していった――。

「てっきり、博覧強記で片っ端から出版物に目を通して先生ならばとっくにご存じだと思っただけなんです。この小説です」

「新作小説を放りだしていたつもりはなかったのだけれどもね。少々、紙芝居の収集に没頭もつとすぎたのかな」

中禅寺の表情に、いつもの「陰鬱さ」とは異なる種類の、影が差した。ここ数年、時折、中禅寺が垣間見せるようになった表情だった。鳥口は（ああ。口を滑らせてしまったかな）と自分の軽口癖を心中で戒めながら、話を切り出した――。

「今年の頭に文化藝術社から出版された幻想小説です。タイトルは、『神社姫の森』。じんじゃひめと書いて、くだんと読ませています。神社姫ってのもくだんってのも、妖怪の名前らしいですね。内容のほうは少々複雑ですが、一言で言えば殺人を扱っています。作者名は――」

この、鳥口が京極堂に持ち込んできた一冊の「本」が、「京極堂」の止まっていた時間を再び動かすはじめていた。

ただし――未来ではなく、過去に向かって。

「作者名は、新進気鋭の新人幻想小説作家――『久保竣皇』です」

久保、竣皇。

「竣すん」ではなく、竣すん「皇」。一文字違いですが、読み方は久保竣公と同じです。出版元も、久保竣公をデビューさせた文化藝術社。久保竣公に新人賞を与えた版元ですよ。しかも久保竣公が寄稿していた『銀星文學』で長編をいきなり連載開始した――

「それは、露骨に悪趣味な売名行為だよ。いや、出版社が主導しているのかもしれないな」「はい。これだけならば話題性を狙った単なる悪趣味な商売だとも思えますし、僕も実際そう思っていたのですが、先日出版されたばかりの第二作が……おかしいのです。こちら

も、処女作に続いて『銀星文學』に連載されていたものを改稿してまとめたものなんです。第二作は、処女作の『神社姫の森』のような幻想小説ではないんです。久保竣皇の第二作のタイトルは――『魍魎もうりょうの匣はこ』

「……魍魎もうりょうの、匣はこだって!! ……それはもしかして、鳥口君」

「そうです。あの『武蔵野連続バラバラ殺人事件』から御宮様、そして美馬坂近代医学研究所へと至る一連の事件を扱った探偵小説です。しかも、その筋立てが……『そのまま』なんです。固有名詞などはいずれも変更されていますし、『武蔵野連続バラバラ殺人事件』をそのまま書いたと読者に断定できるわけではないのですが……探偵小説としては、あまりにも異様な筋立てなので。ですが、それ故に、むしろ当事者が……久保竣公自身が書いたとしか、思えないのです。なにしろ、稀譚舎が土壇場で書店から回収して世に出なかつたはずの——『匣の中の娘』の本文が、そのまま引用されているのです。旧漢字が新漢字に改められているだけで、ほとんどまるごと同じなんです」

※

祖母が亡くなったので急ぎ帰省した。

都会を離れる帰省の列車は空いていた。

この車両にはくたびれた老婆がひとり乗っているだけだ。

休日でも無いのに田舎に向かう者など誰もおらぬだろう。

何と今日は良い天気だ。

車窓からの風が頬に頬に心地よい。わずかに田舎の匂いがした。何と心地よい。

連日の激務が祟^たつてすっかり寝入ってしまった。

白河夜船で昔の夢を見ていると、何時の間にか前の座席に男がひとり座っていた。

色の生白い、若いのか歳をとっているのか判らぬ男だな。ずいぶんと眠そうな、人形のような顔だ。こんなに空いているのに、何を好んでここに座ったものか。

つらつらそんなことを考える。

男は匣を持っている。

たいそう大事そうに膝に乗せている。

時折匣に話しかけたりする。

眠い目をこすり、いったい何が入っているのか見極めようとするが、どうにも眠かった。壺^{つぼ}か花瓶でも入っているのか。

何とも手頃なよい匣である。
男は時折笑ったりもする。

「ほう」

匣の中から声がした。
鈴でも転がすような女の声だった。

「聞こえましたか」

男が言った。蓄音機の乱波から出るような声だ。
うんともいやとも答まなかった。夢の続きが浮かんだからだ。

「誰にも言わないでくださいまし」

男はそう言うど匣の蓋ふたを持ち上げ、こちらに向けて中を見せた。
匣の中には綺麗な娘きれいながびったり入っていた。

日本人形のような顔だ。もちろんよく出来た人形に違いない。人形の胸から上だけが匣に入っているのだろう。

何ともあどけない顔なので、つい微笑んでしまった。

それを見ると匣の娘も
にっこり笑って、

「ほう、」

と言った。
ああ、生きている。

何だか酷く男が羨うらやまましくなってしまった。

※

「ちなみに、『魍魎の匣』の連載を終えた『銀星文學』の最新号にはですね、久保竣皇による次なる新作のタイトルがすでに発表されています。発売日は未発表ですが、そのタイトルは——」

「『姑獲鳥の夏』、なんです」

「先生？　もしかして久保竣公は生きていたのでしょうか。彼が、この小説を。いや、しかし、そんなはずはない。久保竣公はたしかに死んだはずですよ。だって、彼の葬儀を取り仕切ったのは——」

中禅寺は、言った。

「この世にはなにも不思議なことなどないよ、鳥口君——」

続きは、11月14日発売の富士見し文庫で！

©Mikage Kasuga, Natsumiko Kyogoku 2015